
大和国草子

森田カズキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大和国草子

【ISBN】

N5647C

【作者名】

森田カズキ

【あらすじ】

大和国一の武の名家の当主、「武蔵野夢路」は、予知能力のある「不破の巫女」と政略結婚させられることに。しかし、夢路は男色というわけでもないのに巫女との結婚を拒む。果たして、その理由とは・・・。

序章

あるところに、「神山」という一族が治める「大和国」という国があった。

神山は統治力が大変優れていたので、大和国の人々と、二つの強大な一族を束ねることを許されていた。

一つは「不破」。予知能力に優れた「巫女」を頂上とし、その力で国に降りかかる災いを長きにわたり防いできた、名高き一族である。

そしてもう一つ、「不破」のように予知能力を持つ者はいないものの、武の力で神山を支えてきた「武藏野」

彼らの中にも、頂点に立つ者がいる。不破と同じく、その者だけが、受け継ぐことを許された名がある。

「武藏野 夢路」

この物語は、現在「武藏野 夢路」の名を受け継いだ者の、行く末を描いたものである。

序章（後書き）

つたない文章を読んでいただきありがとうございます。
自分でもジャンルがよくわかつていない作品ですが、暖かい田で見てやってください。

第一章・脱・独身へ失った真人間へ（前書き）

今回は漫画やアニメのパロディが数回でできます。なので、パロディ嫌いな人はその辺を理解して読んでください。

B-L描写があるわけではありませんが、本文中に「男色」という言葉がやたらと登場します。言葉も見たくないという方は、読むのをやめた方がいいかもしません。。。

第一章・脱・独身へ失った真人間へ

「不破の巫女」に比べると、その歴史は浅い「武藏野 夢路」の名であるが、現在は二十一代目と長い歴史となつてゐる。

その「武藏野 夢路」は、本口は、現在の神山の長に呼ばれ、神山の城まで赴いていた。

「夢路・・そなたも知つておるだらうが、最近我らを消してしまおうと考える者達がいる」

現在の神山の長「綺羅」は、美しい黒髪を持つつら若き青年で、憂いを帯びた悲しげな表情が、彼の顔を更に魅力的なものにしてゐる。

しかし、そんなそれに対し、夢路は強い口調で答える。

「最近だと? 神山を狙つヤツはいつの時代だつているだらう。今更、急に沸いてきたみたいに言つんじゃねエよ」

憂いを秘めた表情の神山とは対照的に、燃えるような赤い髪を持ち、今にも怒り狂いそうな表情の夢路を夢路の付き人、琥珀が心配そうに見つめる。

「そうだな・・すまぬ夢路。いつの世も、我ら神山は憎まれ者よ。我らが信頼できるのは、今となつては不破と武藏野だけ・・」

武藏野、と綺羅が口にした瞬間、夢路は釘を刺されたような感覚を覚えた。今の綺羅と田を合わせてはいけないと、俗に第六感と呼ぶものが、自身に警鐘を鳴らしてやまない。

綺羅は、夢路が冷や汗をかいていることに気がせず、続けて、話し始めた。

「そこで思ったのだ。今こそ、我らの結束を強める時ではないのかと

「で、何だ。円陣でも組ませる気が？」

「円陣か・・近いかもしれぬ

円陣、と聞いて夢路は、冷や汗をかいだ手を布で拭いてから考え始めた。一体、綺羅が何を考えているのか。円陣と近いといつと一体何なのか。円陣・・円・・輪・・・。輪になつて何をするのが、輪になつてすることといえば、一つしかあるまい。

「円陣なんか組んで、何になるつてんだ。皆で仲良くかもめかも

めでもするのかよ？」「

「武蔵野、貴様！綺羅様のお考えを愚弄するとは言語道断ー！」の刀の鏑にしてくれようか！？」「

綺羅の護衛の中の一人が、先ほどからの夢路の発言に激しい怒りを覚えていたらしく、両手を充血させ、今にも腰に挿している刀を抜刀しそうな勢いだ。

しかし、夢路はそんなことなどお構いなしで、トドメの一発をぶちかました。

「ハツ、やめとけやめとけ、かもめかもめ！」の國の全員でやるなんて無理難題は、真ん中のヤツが後ろの正面当てる確率が低すぎるわ」

何でそんなに「かもめかもめ」にこだわるんだよー！

夢路の付き人の琥珀ですら、思わず叫びそうになってしまった。綺羅の護衛の者たちは、一つの間にか腰に差していた刀をハリセンに持ち替え、ツツ「ミミの素振りをしている。素振りをするたびに風を切る（とこりよりも断絶するという表現の方がふさわしい）音が部屋に響き渡った。

「あ・・あの・・夢路様・・護衛たちをあまり刺激しない方が・・

「何だ琥珀。円陣つまり、輪といえばかもめかもめだろ。それとも・お前は椅子取り遊びの方が好みか?」

「いえ・・・もつじやなくて・・・」

「派閥争いなら負けねーぜ。最後まで走り抜けるからな」

ああ・・もう、何をいつても無駄なのだな・・と琥珀は悟った。

ハリセンの素振りをしている護衛たちをしばらく見ていた綺羅だが、本田の主題を言い忘れていたことを思い出し、再び夢路の方を見つめて語りだした。

「夢路、そなたは限られた人間だけが名乗ることを許される　武蔵野　夢路　の名の意味を知つておるな」

「・・・武の力で神山の夢を形ある路にしろ・・耳にタコができるまで聞かされたぜ」

夢路は自分の耳に触れ、もつ一度「タコ」とつぶやいた。

「そつ・・すべては、我ら神山のため。とこつひとで・・・」

急に綺羅がさわやかな笑みを浮かべたと同時に、夢路は部屋を後にしてしまった。これだ、この笑みだ。この笑みをするときは自分

にとつて口クなことがない。夢路は今までの人生の中でもう学習していたのだ。

だが、そんな夢路の少ない経験値よりも、綺羅の年季の方が一枚も一枚も上手だった。

「まあ、待て」

綺羅はあわてるやぶつもなく、隠し持っていた装置を取り出し、出っ張った部分を強く押した。

すると信じられないことに、装置を押した瞬間、夢路の頭上にタライが出現したのだ。あまりにも一瞬だったために、夢路は気づかず、そのままタライとランデブー・。

「あべしーー！」

「だから待てといったのだ」

「痛・・タライ・・・?ちょっと待て、何だつて天井からタライが降つてくるんだよー」

「最近は物騒な世の中になつたものよな・・」

「防犯対策!ー?」

綺羅を出し抜くことは到底できなかつた、と夢路は思つた。出し抜くことなど、恐ろじなくてできないが。

「で、本題に入らひ。夢路・・そなたには『不破の巫女』と祝言をあげてもらうわ」

「何だ、祝言だらうと油だらうと何だつてあげてやるぜって…あ？ああ？あああ？ああああ！？」

人の話は、ちゃんと聞けよ…と付き人琥珀と綺羅の護衛の者はちは夢路を冷めた瞳で見つめたが、当の本人は思考回路がショート寸前、顔色は白くなったり、青くなったり、赤くなったり…これで黄色も加われば、某ロボットアニメの機体の色になるほど動搖していたので、そんな冷めた瞳におしおきする余裕はなかつた。

「祝言！？祝言つてあの！？」

「そなたも、もう十五・・おかしくはあるまい」

「巫女と祝言・・！？無理だ・・不可能だ・・ありえない・・だつてオレ・・」

いつもは斜に構え、人を喰つたような表情の夢路が、あまりにも動搖するので、琥珀をはじめ護衛たち、当然綺羅も疑問に思った。そして各々思考回路に鞭を打つ勢いで、この理由を考え始めた。そして皆・・ある結論にたどり着いた。

「そ・・・そなた・・まさか・・そつち系？」

綺羅は自分の体を夢路から遠ざける。琥珀や護衛たちが先ほどまでいた位置より夢路から離れて見えるのは、おそらく氣のせいではないだろ？。皆、自分で自分の体を抱きしめる体制をとり、夢路を見つめる。

「待て！違う違うぞ！そういうことじゃないぞ！オレは決して男

色、衆道、とは関係ないからなー別に三度の飯よりお前らが好きとか思つてないからな！」

「・・・思こつたり否定するとひるが座じこな

「ああ・・・」

「何だよ・・・信じてくれねHのか・・・!?感じねHのか・・・オレの
小宇宙コスモスを!-!」

皆はしじまりく考えた。そして、その後深いため息をつこう・・・
言つた。

「男色のコスモか・・・」

「何かやっぱそつ・・・」

「感じたとしたら、同類つてことだよな・・・」

「そんな・・俺なんか感じちまつたのに・・・」

「うづ~もひ金輪際お前とは口きかないから」

話が展開してるー?夢路は、なんだかさびしい気持
ちになつた。

「・・とにかく、男色であつても、男色でなくとも、男色であつても、
も、『』これはもう決めたこと」

「ちよつ・・綺羅、何で『男色』であつても』を一回も言つんだよー。
?必要あるの?」

「これを機に、足を洗つてはいかがかな?」

「いやだから、オレは・・」

夢路は政略結婚とともに、『男色』の烙印を押し付けられてしまつたのである。

武蔵野夢路、人生十五年目にして脱・独身をするのが、それとも、
自分に嘘をつかず、正直に生きて、脱・真人間をするのか・・夢路
の人生は・・どっち!?

「だから...オレは男色じゃねーんだつてばー。」

第一章・脱・独身へ失った真人間へ（後書き）

主人公の扱いがかわいそうですね・・。大丈夫、次はがんばってく
れると信じているから。（他人事！？）

危機を壊々する機器があつたなら（前書き）

綺羅「夢路、そなたは才能もあるし、まだまだ若い。だから、そなたはここじゃないどこかで能力を發揮すべきなんじやないかな？」

夢路「ちょっと待て！前回ってそんな遠まわしに解雇宣言される話だつたか！？」

危機を嬉々する機器があつたなり

巫女との結婚など、できるはずがあるだらうか。

屋敷に帰つてからといつもの、夢路の頭で、その言葉が絶えず回り続ける。

人払いをしてまで悩み続けることではないのはわかっている。
だが、今誰かに会つと、真実を告げそうになつてしまふのだ。
自分は、「武蔵野夢路」の名を継ぐのにふさわしい人間ではないと
いうことを・・。

現在の「不破の巫女」を夢路はくわしくは知らない。今まで通り、
優れた予知能力を持つと聞く。
そして・・かなりの美人らしい。

「(口)は普通喜ぶところなんだろうがな・・・」

決して夢路は美人が嫌いなわけではない、美人の妻・・大いに結構
なことだと思つてゐる。

しかし、困るのだ。過去、現在、未来のどの段階であつても、妻を
娶るのは、困るのだ。

かといって事情を説明することはできない、何故、自分が妻を娶る
ことができないのかを説明した瞬間、自分は「武蔵野夢路」ではな
くなるからだ。

「武蔵野夢路」の名は、今まで初代「武蔵野夢路」の直系の者・・
すなわち武蔵野本家が継いでいた。

当然夢路も、武蔵野本家の者である。

もし、自分から「武蔵野夢路」の名前が奪われたら、本家の血は絶

え、分家の者が名前を継ぐ」ととなつてしまつ。

「それだけは絶対に避けねエと、オレは先祖に顔向けできなくなつちまつ」

ああ、どうして自分がこんな日に・・筋違いであるとはわかつていても、夢路はある人物を怨まざるを得なかつた。

「もし、あの人気が生きていたなら・・オレは今・・」

「武藏野の血を絶やさないための、道具とされていたに違ひないですわ

朱鷺とき !?

夢路の驚いた顔を見て、朱鷺という名の少女は笑つてしまつた。

「あらあら夢路様、まるで鳩が豆鉄砲を食らつたような表情ですわね」

「朱鷺が急に入つてくるからだろ！？何で・・」

このとき、夢路は自分が人払いをしていたことをすっかり失念していた。

動搖のあまり、自分がしたことを忘れてしまつたようだ。

何故入つてこれたのかを思いだしだが、時すでに遅し。

頭をかいて、夢路が恥ずかしそうにうつむいたので、朱鷺は更に笑つた。

「あ～・・そうだった・・オレが自分で・・」

「人払いをなさつたの、思い出しました？」

「不破の巫女」との件を聞かされてからといふものの、普段なら決してやらないようなことをやってしまつ自分がいること、夢路は気づいていた。

いつものように、斜に構えた自分でいることが難しい。

「何だかもう・・・滅茶苦茶だ」

「神山様のお話がそれほど夢路様を追い立てるようなお話だったのですか?」

「ああ、一巻の終わりだ。一巻は始まらない・・打ち切り以下だクソッ」

「一体、神山様は夢路様に何をおっしゃったのです?」

「それは・・・」

夢路は、神山綺羅が話したことを朱鷺に告げた。

「あらまあ・・・巫女様と」

「朱鷺・・オレはどうすればいい?」

「巫女様を奥様にする以外に答えはないと思いませんわ」

確かに、そうなのだ。神山綺羅に逆らつといふことは、大和国すべての人間を敵にまわすようなものだ。

そんなことをしたら、その先の結果は見えている。

「オレだってわかってる・・だけどな・・オレが巫女と祝言をあげたりしたら、お前だって困るだろ!・?」

「それはそうですわ!だって私は夢路様の・・」

危機とは続くもので次の瞬間、夢路は更なる窮地に追い込まれることになる。

「あの～お取り込み中すみません」

「そんな馬鹿な・・・たわばつ！？」

突然入ってきた従者の言葉に、夢路は、どこかで聞いたことのある断末魔・第一段を発してしまった。

「夢路様、不破の巫女様がお越ししております」

「ふわのみこ・・・附和の魅粉・・不破の巫女おおおおー？」

「は・・はい。何でも、夢路様にお会いしたいとか」

危機が、危機を呼ぶつ キキー。

危機を嫌々する機器があつたなら（後書き）

- ・ハジけす~~おま~~ました。（こくつだよお前）
- 題名も駄洒落、最後も駄洒落、どことなく香るのはオヤジの香り・・・！最低じゃないか・・。
- ・次はまじめにできたらいいな（希望かよ）

上から読んでも、下から読んでも（前書き）

従者「夢路様、お届けものです」

夢路「ん? 何だ? · · · 差出人不明、生ものなので注意 · · · った
く面倒だな · · ん? 『巫女在中』! ? 確かに生ものだけどよーーー!
?」

上から読んでも、下から読んでも

「・・今、何て言つた？」

「は？その・・不破の巫女様が、夢路様にお会いしたいこと言つております」

何ということだらうか！現在の段階で一番会いたくないヤツが、会いに来たなんて！

最近流行りの空氣読めないと、じうじうとだつたのか。まさか自分が身をもつて知る由が来るとは、夢路は夢にも思つていなかつた。

だが、ここで慌てた素振りを見せては怪しまれる。ここには余裕の表情を見せてやり過ごそつ。殺られる前に殺る。慌てる前に慌てさす・。慌てず、騒がず、美しゅう・・びいかで聞いた言葉だ。

「会いたいだつて？ああ、いこた会つてやひつ。で、今巫女はどこに？（来ないでください。来ないでください。本当に来ないでください）」

我ながら嘘をつくるのが上手こと、夢路は思つた。それにしても、口と腹が違いますわ。

「今、夢路様の屋敷の前まで来てありますか・・」

「うぐっ」

今の夢路の心情は、抜き打ちで持ち物検査をすると伝えられた由に限つて、いらないものをもつてきた時の心情と似て非なるものである。が、しかし、それと近く、また同様と言つて過言ではない。（

学者は「いつこいつに方を好むものだ」 わかりにくく

「呼んでもしようつか？」

「黙目だー上から読んでも、下から読んでも、黙目だーーー」

ああ、オレ、今上手いことを言つたな・・なんて感心している場合じゃない。愛は地球を救うかもしないが、上手い言葉は世界どこのか、自分自身さえ救ってくれない。数秒の間面白いただけなのだ。

「お前、夢路様は、身だしなみを気になさるお方なの。それが祝言をあげる相手が来ているとなれば、尚更そうですわ。だから巫女様に、しばりくお待ちくださいと伝えなさい」

「は、はいー」

夢路があたふたしている間に、朱鷺が従者に巫女の足止めをするよう命じた。足止め、とは言つたものの、あまり時間をかけては怪しまれるだらう。

「・・助かつたぜ」

「安心していろの場合ではありますんわ。わあ、早く、お召し物を普段着から正装に・・」

「わかつてゐるつて。・・・今は誰も入つて来ねえだらうから、コソコソ着替えなくともいいよな?」

「・・・お召し物を脱いでからこいつじではないと思こますナゲビ」

最初からそのおつもりでしょつかーと、朱鷺は、ため息をついて言った。

「・・・夢路様」

「何だ、朱鷺・・・」

もはや半裸と言つてもいい状態の夢路が、朱鷺の方を見つめる。朱鷺もまた、夢路を見つめる。一人はどうちらも、艶のある笑みを浮かべて、笑う。

「決して・・決して、巫女様に心を許さぬよ！」・・心を許せば、夢路様の秘め事を知られることになりますわ」

「ハツ、オレがそんなんへマすると思ひのか？」

不敵な笑みを浮かべる夢路の言葉を一蹴するかのように、朱鷺は続けた。

「ええ、夢路様は甘い」ところがおありですから」

「・・オレつて信用ねエのな」

夢路は、正装の着物を身にまとつと、頭をかきつつ、苦笑いをした。

「だから、私がいるのですわ」

「・・ある時は、武蔵野夢路の世話係」

「そしてまたある時は・・・」

朱鷺は、着物の袖に入れ、中に仕込んでいた針のようなものを取り出し、部屋の壁にそれを投げつけた。ただ、壁に投げたわけではない。針は、壁を徘徊していた蜘蛛の頭へと、突き刺さつていた。

「武蔵野夢路の裏事情を知つたものを影で暗殺する『始末屋』・・

だろ」

「たとえ大和国を不落としてきた不破の巫女でも、夢路様の秘め事を知つてしまつたなら・・始末するしかありませんわ。まあ、そうならなければいいのですが」

「知られないよう努力はしてみるぞ。もうこれ以上、お前の手を汚したくない」

そう言つた夢路の表情は、どこかつらやうだった。それに対し、朱鷺は、まるで気にする必要はないと、語るよつに微笑んだ。

「・・・そう思ひながら、決して心を許されますな」

「ああ、わかつてゐよ。オレが武藏野夢路であり続けるためにも」

正装に着替え終わつた夢路は、自ら不破の巫女を出迎えに行つた。

足石なんて相手もわかつてないと駄目（前書き）

夢路「ついに不破の巫女の登場だ！野郎共、丁重に出迎えてやりな！」

野郎共「おおう……」

夢路「茶の用意は忘れるな！座布団はやわらかいヤツだぞー・あつ、テメー熱々のお茶なんぞいれやがつて・・巫女が火傷したらどう責任とする気だ」

朱鷺「・・本当に一重にお出迎えするなんて。皆様不良みたいなお姿ですのに」

定石なんて相手もわかつてないと駄目

「お待たせして申し訳ない・・貴方が不破の巫女か・・?」

屋敷の玄関にいた不破の巫女を見た瞬間、夢路は言葉に詰まつた。隣にいた朱鷺も思わず、「まあ」と艶っぽいため息をついてしまつ。

「大変な美人だという噂は本当だつたらしいな」

不破の巫女は、大和國の人間にしては珍しい白髪（近くで見れば金にも見える）に、淡い紅の瞳の、夢路より少し年上の女性であつた。そして、今まで見てきた美人と何処か異なる印象を受けた。紅、という点では夢路の髪もそうなのだが、これは武藏野の由来を知れば当然のことである。

「そんなことは・・」

不破の巫女は、白い頬を朱に染めて、俯いた。そんな姿もまた、妙に美しい。思わず見とれそうになるのをじらえて、夢路は巫女に言つた。

「しかし、何故今日我が屋敷に参られたのです？それもお一人で・・

「それはその・・お話したいことがあります・・それで・・」

巫女の話したいことは、一体何なのだろうか。とりあえず、応接間まで巫女を連れて行くことにした。

巫女を連れてきた従者は、役目を終えたので屋敷から立ち去った。

しかし、朱鷺達屋敷につかえている者の仕事はこれからだ。

「朱鷺殿、夢路様と巫女様に出すお茶菓子を用意してまいります
「頼みますわ」

下女が茶の用意をしに言つたのを見計らつてから、朱鷺は誰もいな
いはずの廊下で声を上げた。

「・・・どちら様でしうつか?」こには夢路様の屋敷に「やれこますわ。
私の気が高ぶらないうちに帰りいただけませんこと?」

返事はない。考えすぎなのだうか・・いや、そんなはずはない。
朱鷺は確かに感じた。

間違いない、今この屋敷に何者がが息を潜めているのを察した。
だが、一向に返事はない。
それもそうだらう。相手とて馬鹿ではない。こにはやう過ぐして、
相手に気のせいと思わせるのが、闇に潜む者の定石だ。

「・・でも、定石通りも考え方ですわよ?それに、相手がいつも
定石に応えるとは・・限りませんわ」

次の瞬間、朱鷺は何処へと消えていた。

「夢路様、お茶菓子を用意いたしました
「ああ、すまねえな」

下女が、応接間の机の上に茶菓子を置いた。茶は注いだばかりのか、白い湯気が天井へと昇つていく。

「口に呑つかどうかわからないが……」

「ええ、ではいただきますね」

巫女が、ふわりと笑うたびに、夢路はどうしたらいいのかわからなくなってしまう。今まで、美人を見たことなんて何回もあるというのに。

そして、それと同時にある罪悪感が胸を締め付けるのがわかつた。

(オレでは・・巫女に・・)

心の中で、罪悪感が最大になる前に、巫女が用意した茶を一口飲み終えてから、言った。

「おいしいお茶ですね」

「や、そうか。そういうともらえると、用意した下女も喜ぶでしょう」

「夢路さんは、お優しい方なのですね。田下の者のことを探にかけるなんて、武家の頂点に立つ方がするとは思いませんでした」

「い・・いや・・自分は・・」

ことが知れてしまつたら、自分はもしかしたらあの下女と同じ立場に立つことになるかもしないと思うと、田下の者とは思えないのだ。いや、もつと悲惨になるかもしれない。

「何をそんなに怯えていらっしゃるのです?」

「つ・・」

感づかれるのも無理はない、と夢路は思った。自分でも動搖しているのがわかるのだから、他人から見れば、なおわかるはずだ。ましてや、相手は特殊な力を持つ巫女なのだ。

だが、今、夢路は怯えているのではなかつた。
怯えといつよりは、先ほども述べたように罪悪感が夢路を動搖させているのだ。

「・・すみません・・」
「え・・?」

どうして巫女が謝るのか、夢路にはわからなかつた。それでも、巫女はもう一度、「すみません」と告げた。

「夢路さん・・貴方は神山様から祝言のお話を聞かされたと思います」

「・・その通りだが・・」

「あれは神山様が提案したのではありません。・・私が、提案したのです」

「…?そりゃあ・・何でまた・・」

夢路に謝罪したと同時に頭を下げていた巫女が、頭を上げて、言った。

「不破の一族を・・滅ぼしたくないからです」

静かな部屋に、凜とした巫女の声だけが、響いた。

鳩が蛇を喰らひ（前書き）

夢路「今日はネタ切れらしいぞ」
朱鷺「まあ、だらしのこと」
夢路「この次の話でタネあかしするらしいぜ」
朱鷺「ネタとタネ・・笑えませんわね」

鳩が蛇を喰らつ

「不破の巫女の一族が滅ぶだつて？・・・不破が絶滅危惧種になつた
なんて話は聞いたことねエな」

「そうでしょうね。だつて人に話したのは貴方が最初ですから
「な・・・」

一本とられた・・・！しかも、こんな大人しそうな巫女に・・・顔
に似合わずやるな・・と夢路は思った。

「そんな鳩が蛇を喰らつたみたいな顔しないでください」
「どんな顔だそれは！喰らつたはどっちの意味なんだ！？ぶつけら
れたのか、それとも本当に喰つたのか！？」
「・・それは・・秘密です」

・・・どつかの神官みてーなこといやがつて・・。

夢路の怒りは最高潮に達していた。

まあ、怒りといつても本当に怒つているわけではないが。

「で、オレの顔のことより、絶滅危惧種の不破さんは何で、オレと
祝言をあげようと思つているんだい？」

「・・それは・・・不破の血を絶やしたくないからです」

「ウオイ！振り出しに戻すつもりか！言いたいことは、はつきり言
えとオフクロさんか人生の師匠に教わらなかつたのかい？」

夢路が言いたい放題言つた後、巫女は少し黙つてから、言つた。

「母は・・先代の巫女は今は幽閉されています」

「！？幽閉・・？」

そんな話は聞いていなかった。

それに、「不破の巫女」は「武蔵野夢路」同様、死ぬまでその名を受け継ぐと決まっていたはず。

今まで、その名を受け継いだものの中に、途中で名を剥奪されたものはないと思っていたのだが・・・。

「母は、私が産まれる前から・・・おかしくなつていたんです。長きにわたる近親結婚のせいでしょうかね・・・心が・・・壊れてしまつたんです。体の限界が来るより遙かに早く・・・」

だから、母は幽閉されたのだと、巫女は夢路に告げた。

先代の巫女の話を、夢路はよく知らなかつた。

幼かつたせいもあるだろうが、ただ、気がついたら今の巫女・・・つまりは、今自分の前にいる人物が後を継いでいたという記憶しかない。

周りの人間も確か「巫女は死んだ」と言つていたはずだ。

「なるほど、幽閉という形で上手くもみ消したつてわけか」

「母の場合は・・・ね。ですが、不破の一族は今、近親結婚が原因で状況は悪くなる一方です。精神、肉体に異常をきたす者も・・・増え続けています。私の・・・」の姿とぞうです」

巫女は、長く伸びた白髪の一房をつかんで、ため息をついた。淡い紅の瞳が潤んでいるように見えるのは、夢路の氣のせいではないはずだ。

「それも近親結婚の結果つてことか・・・

「おやじくは・・・実際にそなのかはわかりませんが、おやじくは・

・

巫女が着物の袖をすつと持ち上げると、そこには、巫女が夢路と同様に秘密を抱えていることの証明があった。

「……お前……そりや、まさか……」

その後、姿を消した朱鷺は、忍び込んだ者の気配を探り、見つけることに成功していた。

「ようやく見つけましたわ。あまり手間取らせないでくださいな……」

朱鷺の怒りに満ちた声に、隠れ続けることに限界を感じたのだろうが、忍び込んだ者は観念して自分から出てきた。

「探してくれとは、言つてないけど……？」

全身を黒ずくめの、いかにも密偵といった容貌の男がけだるそうに言った。中肉中背、どこにでもいそうな青年である。だが、密偵の場合、目立たないほうが何かと都合がいい。どこにいても溶け込める、「当たり前」の雰囲気がなければ、情報収集をする面で不便であるからだ。

「貴方……巫女の始末屋ですの？」

この黒ずくめの男から、自分と同じにおいがしてならない。朱鷺は、そう感じていた。

男は、口を見せない衣装を着ていながら、あきらかに、笑つたのがわかつた。

「教えない」

「・・知りませんでしたわ、巫女の始末屋は、拷問がお好きだなんて・・私、拷問の知識はありませんけれど、精一杯・・やらせていただきますね」

「いや、結構」

男はきつぱりといった。先ほどは笑っていた顔が、今は少々引きつっている。

「まずは何がよろしいですか？鞭打ち？剥皮？凌遲？私のお勧めは剖腹ですが・・どれが・・」
「本当に結構・・です。うわあ、どれも最悪じゃないのか。鞭打ちがまだやさしい刑に思えてきたよ」「なるほど、たたかれて快感を感じる・・と」「ちよつとちよつと、何勝手なこと言つてんのを」

観念して出て行くと、そこは、拷問の国でした。

「さて、お遊びはここまでです。答えなさい。何の用があつてここに来たのです？巫女は今日、何をしてここに来たのですか？」
「巫女から聞かなかつた？おたぐらのとこの大将に会いに来たのさ」「会いに来たとは聞いています。ただ、それを鵜呑みにするほど、私はお人よしではありませんの」「・・・本当に会いにきただけと思つよ？それとも、会いに来ちゃ困るわけ？」

そうだ、困るのだ。巫女が会いに来て、夢路の秘密に気づかれでもしたら困る。

しかし、巫女に気づかれる前に、この男に自分が今動揺していることを悟られるだけは避けたいと、朱鷺は思つていた。

「ついにう男は、つけ込んでくるのだ。

朱鷺は、必死に平常心を保とうとした。

「ええ、困りますわ。しかも、屋敷に始末屋まで忍び込んで……もしょその間者と間違えて……ああ、これ以上とも私の口からは……」

「アンタ……見かけによらず、恐ろしい」とつねえ……せつきから

「あら、私は始末屋ですから」

始末屋がただのきれいな娘では意味がない。美しかろうが、醜かろうが、命令に執着し、必ず相手を始末する。それを満たしていればいいのだ。

「……それよりね、おたくが巫女を疑うのは勝手だけじね。巫女は、本当に会いに来ただけだと思うよ。不破は武藏野をどりにしきょうなんて考えちゃいないさ」

「さて、獣咬の準備をしてきましょうか」

「本当に本当だつて！誓つていもいい。今の段階で、巫女が不破の屋敷から抜け出したことを知っているのは、巫女の……密偵の俺っちだけさ。そして……あの人は……おたくらの大将を確かめに来たんだと思つ」

黒の着物に身を包んだ男は、巫女の密偵であった。

これは嘘ではないのだろう。朱鷺は少しだけ、この男を信じることにした。

「仮に貴方の仮説が正しいとして、何を確かめるというのです」

「……武藏野夢路が、巫女の秘密を共有するに値する人物なのか

を
「

一人の自白（前書き）

夢路「随分と・・間があいたな」

朱鷺「仕方ありませんわ。作者が修羅場だったのです」

夢路「・・・試験か」

朱鷺「ええ」

夢路「オレの秘密、やつぱりバレるかな」

朱鷺「至難です」

一人の自白

「お前・・・それは・・・」

夢路は、巫女の顔を見つめた。巫女は夢路に見つめられても、特に表情は変化しなかった。

「わかつてもらえたでしょうか・・・これが私の・・・貴方に話したかったことです。・・・不破といふ名前は今では皮肉としか思えません」

「ああ・・・確かに」

「・・・血族結婚をこのまま繰り返せば、不破の力は『破られる』ことはないでしょう。ですが、このままでは、不破は内側から『破れて』いきます」

「確かにそうだろうな。だが、巫女・・・その体では子を成すことはできねえだろ。お前の体では、男のオレとの間に子は産まれない・・・」

「

着物の袖をまくった巫女の腕には、点々と浮き出る内出血があつた。

ただの打撲では、あそこまで酷い内出血はできないだろ？

「血友病は、古来より男児に多い病・・・神山も永きに渡り血族結婚が行われているから、同じような症状を持つものを見たことがある。お前は・・・」

「女子は皆、死んでしまったのですよ。・・・僕が今不破の中で若い命です」

夢路はここで初めて納得した。

初めて巫女を見たときから、美しいとは思ったが、他の美女とは

どこか違つた色氣のよくなものを感じていた。

まさか、男だつたとは。

だが、これはこれで都合がよい。これなら、自分の秘密を知られても、困ることはない。

朱鷺が、巫女を暗殺する必要もない

「何で、オレに話す気になつた」

巫女を演じ続けてきた青年は、美しく笑つてから言つた。

「こゝの話は、僕から持ちかけた・・なのにその僕が話さないのはおかしいでしょ?」

「最初から話すつもりだったのか」

オレは秘密を最後まで話すつもりはなかつたというのに。ああ、この男は、武人であるオレよりも肝が据わっている。知られることを恐れてはいない。

夢路は敗北感のようなものを覚えた。しかし、不快な敗北感ではない。それどころか、自分の伴侶となる人間が自分より強い人間だということに、安心にもにた感情が沸いていた。

「・・強いな・・」

「いいえ、僕は弱い人間です。不破が滅ぶのを黙つて見ていることができないから、武蔵野を利用しようとした・・不破の人間でなければ誰でもよかつたんです。・・ずるい人間でしょう? 酷い人間でしょうか?」

「いや、それでいいんだ・・不破が滅ぶことは許されない、もちろん、武蔵野が滅ぶこともだが・・」

「・・・僕と貴方では、子を産む」とせでもあせん」

巫女は悲しそうに呟つた。

「いや・・・そりでもないぞ・・・」

「え・・・?」

夢路は、覚悟を決めた。決めざるを、得なかつた。

場面は移つて、朱鷺と男の会話。

「巫女様は随分と行動的なのですね」

「不破のためなら何でもする。そういうお人さ・・・そりでなきや、男の身で武藏野の当主の嫁に行くなんて言わなこた」

「男・・?」

朱鷺は唖然とした。ひょっとしてこの男、自分の主君の秘密をあつさりと語つてしまつたのではないだらうか・・いや、氣のせいではない、明らかに今「巫女は男」だと告げた。

「不破以外の家なら、『じ』でもよかつたんだらうけど、今信用できるのつて武藏野だけなんだよね~下克上の時代が憎い~」

秘密をバラしたといふのに、まったく氣にしていない男に、朱鷺の苛立ちは募つていぐ。自分にはできない芸当をこの男はやつてのけた。それが朱鷺には許せなかつた。

たとえ夢路に命令されたとしても、自分にはできない。真に信用

した相手に告げるよう言われたとしても。

「武藏野を選んだ理由なんて、どうでもいいですわー。」「え？結構重要じゃないの？」

「それよりもーどうして貴方は、巫女が男だと私におっしゃったのですか？」

自分には理解できない行動をする動機を、朱鷺は知りたかった。男は、朱鷺の青やめた顔を見つめると、その細い頸に手を置いてみせた。知らない人間に、まして、男にこんなことを許したことはなかつた朱鷺は、屈辱を覚えてはいるものの、動くにすらできなかつた。

「アンタと取引がしたくなつた」

「な・・何を・・」

「アンタ、今まで怪しいと思つたヤツは全員殺してきた。だから、悟られるつてこと、なかつたと思つ。・・違つ？」

朱鷺は確かに、今まで、自分が怪しい、夢路について疑問を持っていると思ってた人間を必ず死に追いやつてきた。

悟られる前に、相手を殺してきたのだ。悟られるところだが、あらうか。

「間違いなくアンタは、主君の秘密を知つてるや」

「・・・・・」

朱鷺はすばやく、男の手を振り払うと隠し持つていた小刀を男の喉に突き刺そうとした。しかし、男も素人ではない。小刀が自分の喉に突き刺さる前に、朱鷺の腕を掴んで止めた。

「安心しなつて。巫女の秘密を外に漏らさなきや、おたくの大将の秘密も墓場に持つてくれからや。だが・・・もし、言えば・・・」

「・・貴方が私を殺すというんですの?」

「そいつは、もうわかつてるだろ?」

勝手な人間だ。朱鷺は思つた。まだ自分は秘密を言つとは言つていないのに、いきなり取引だ、などとふざけたことを言つてゐる。しかし、巫女が男だということは、いざれわかることだった。それと同様に、夢路の秘密もいつかはあの男に知られてしまう・・・だったら、今ここでいうことも、後で知れるのも同じではないのか。

「貴方の言い分はわかりましたわ。ですが、私の口から夢路様の秘め事を言つことはできませんの。・・知りたければ、夢路様から聞いてくださいな」

「あいら、そうなつちゃうわけ。じゃ、そろそろ巫女様を迎えに行きましょう・・・といいたいところだけど・・・」

朱鷺と男の周りを、謎の集団が取り囲んでいた。

危うしー主人公ーー（前書き）

夢路「…………」

朱鷺「どうしましたの？」

夢路「…………これ、誰が主役だ？」

朱鷺「夢路様でしょ？」

夢路「…………何で名前も公表されていないヤツが出しゃばってんだよ。
・」このままだと題名が『ZANASHI』になるぞ。どつかの忍者

漫画かつての「

朱鷺「夢路様も忍者に憧れていらっしゃいますの？」

夢路「実はそうなんだつてばゾー！」

危うし！主人公！！

謎の集団に囮まれた。上は50才、下は10才。守備範囲が広いにも程がある。数は30人程、小学校の人クラス分だ。

「貴方のお仲間ですわね。道理で話が上手いと思いましたもの。これから死ぬ人間に何を知られたって構わない・・つてことですか？」

「いや？俺たちのお仲間はあんなに守備範囲広くないよ」

「まあ、ではあの方達は派遣社員ですね？」

「そうじゃねーよー！」

男は、ツッコミたい気持ちを何とかこらえて朱鷺に言った。

「派遣でも正社員でもないって・・俺たちあんなヤツら知らない」

「まあ、この期に及んで・・！とぼけるのですか！？」

「どういえばアンタは納得するのヤー？」

謎の集団が登場も、今のこの一人にはあまり関係がないようだ。

謎の集団は相手にされずに少しがびしそうである。かまってくれよ

という瞳で、朱鷺たちを見つめるが、まったく相手にされていない。

「随分余裕みたいだけど、甘いんじゃないの？離菊率いるこの「杏子集」から逃げられるわけないでしょ」

謎の集団の中にいた女の子が、朱鷺と男の間に入つて、言った。

離菊と名乗る女の子は、まだ12、3歳といったところで、明らかにこの場に不釣合いだ。

「そりや、杏子は甘こさ。お嬢ちゃんはもうおうちへ帰りなさい。」

「甘々ですわね。どうしたんですの？道に迷ったんですの？大丈夫ですわこの森からは何人たりとも連れられませんもの～」

「オイオイ、全然大丈夫じゃないじゃん～」

なめられている、と悟つてしまつた雛菊といつ名の少女は顔を真っ赤にして周りの味方に命令した。

「やつちやえ――――！」

杏子集を名乗る集団は、容赦なく朱鷺達に襲いかかる。

「ハツ！登場した段階で名乗れてるからつていい気になんないでよね～！」ちとりまだ名無しだからな――――！いい加減名乗らせろ――！」

そういうえば、そうでした。大丈夫、今回明らかになるはずだから――！

「権兵衛さん、落ち着いてくださいな。貴方には権兵衛といつ立派な名前が・・・」

「現在進行形で名無しだからつて権兵衛呼ばわりかよ・・お約束すげじやないのや・・」

「」の後、権兵衛呼ばわりされて落ち込んでいる男に更にトドメをさすかのように、雛菊が悪気なく失礼発言をしてしまつ。

「権兵衛！」の雛菊ちゃんを子供扱いした罪は重いんだからね～！
「お前も俺たちのコト権兵衛呼ばわりかーい！――」

もう我慢できなかつた。これ以上我慢すると、俺たちの何かが、

爆発しちゃう気がして……（後日談）

男は、雛菊の頭を思いつきりたたい。流石に女の子の顔を拳で殴ることはしなかつた。どうより後が怖くてできなかつた。

「いっただあ・・何すんのよーおつ父にもぶたれたことないのにーー！」

「ぶたれいで大人になつたヤツがどこの世界にいるんだーー！」

もう一撃、追加。

「一度もぶつた・・！」

「ああ・・ぶつたぞ」

振り返ると、朱鷺が「うつわ最低」といたげな顔でこちらを見ていた。ああ、登場わずかにして「女性にも平氣で手を擧げる男」になつちつたよ・・。まだ名前も公表されてないのに・・。

「女子の体をぶつなんて・・最低ですわ」

「・・原因作つたのは、あんたさ。あんたがあの時俺たちのコト、権兵衛つて呼ばなけりや・・」

「こんなことにはならなかつたのに・・それが悔やまれる。

「それはすみませんでした・・土左衛門さん」

あれ？ これ昇格？ 降格？ もう、女なんか嫌いだ。

襲い掛かってくる集団を殴り飛ばしながら、男はそう思つた。

「あーんもう・・杏子隼、ボロボロだよー・・まつ、でもこいがー

「よろしいのですか？残りは貴方一人・・ここで見逃すと思つていいのですか？秘密を聞いてしまつた貴方を返すほど、私は甘くはありませんわ」

朱鷺は、雛菊に歩み寄ると、一体何本持ち合わせているのか、小刀を取り出し、雛菊の首筋へとむける。

しかし、雛菊は特に応戦するでもなく、言い放つた。

「秘密？そんなの知らなくてもいいもーん。どうせアンタたちの主人は、あの方にやられちゃつてるに決まつてるし〜」

「あの方？」

「誰さ、そいつは」

朱鷺と男の表情が一瞬にして険しくなつた。今にも、雛菊を焼いて食いそうな雰囲気である。

「そこまでは言えないの〜雛菊はそこのサイマー男みたくお喋りじやないからあ」

「誰がサイマーだ、誰が・・おしゃべりだと・・？オイ、小娘、三発目を喰らいたいのか」

「あら、三発目は、私がさしあげますわ・・なんなら四発目も私が・

・」

大人つてのは、せこい生き物なんだなこれが。

「あう・・そ、そんなに睨まれたつて教えあげない！雛菊の任務はこれでおしまい、時間稼ぎに引っかかるつてくれてありがとーじゃねつー！」

大人つてのは、しつこい生き物なんだな、これが。

そう簡単に返すはずがないのであった。朱鷺が雛菊の右足を、男が左足を思いつきり引つ張った。帰ろうとしていた雛菊は、バランスを崩し、そのまま地面に倒れた。

「ひやん！」

「まだ・・お帰りの時間には早いんじゃないのさ？」

「任務が終わつた今なら、何を話そつと、じょつと、構わないんじやありませんこと？」

黒い大人が、襲い掛かつてくる。黒い大人が、襲い掛かつてくる。黒い大人が・・。

「いやああああああーー！」

少女の悲鳴が森の中にこだました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5647c/>

大和国草子

2010年10月8日11時48分発行